

ワイン課通信 1月号

今回のワイン課通信は、ワインへの『想い』や『愛』をテーマにいつもとは違う角度からワインと私達の関わり合いについて考えて行きたいと思います。

『ワインへの想い』

～ 事件です...！～

2008年も残りあと僅かという年末のある日...
衝撃的なニュースが耳に飛び込んで来ました。

すでにご存知の事と思いますが、パカレ氏のボージョレー・ヌーヴォにショウジョウバエが混入していたらしく、輸入元が自主回収を始めたというニュースです。

とあるワインショップで購入した消費者が異物の混入に気付き苦情を申し立てた所、ワインショップの店員が

「虫入りのほうが美味しい」

と伝えた事で、消費者が保健所に持ち込んだらしいのだが...

これは、事と場合によってはインポーターを壊滅に追いやるほどの一大事であるのではないのでしょうか...

しかし、自然派ワインと呼ばれるワインの中には、未だにこのような事態がいつ起きてもおかしくないワインが存在するのも事実です。

かつて、とある造り手の虫の入ったワインが、ごく一部のマニアの間で引き合いに合ったこともあった、現在に至るまでの様々な経緯はあるにせよ、いろんな意味でワインに対する気持ちや想いが残念なことに、消費者に届けられなかった。

これは、製造元もしかり、パカレは来年のヌーヴォは造りたくないと言っているらしい...

食品に対する不安が取沙汰され続けた2008年消費者は常にピリピリとした状態でそれらと向き合っています。ワインもその対象のひとつであると強く思う2008年を締めくくる事件となった。

～ワインを愛する私達にできること...～

ワインは、農産物であり醸造酒であり嗜好品です、その時によって表情も違います、ゆえにブランド品のバッグのように記号や単位で価値を量れないものだと思います。

ワインを造る生産者達は不味いワインを造ろうと思ってワインを造っていません、ましてや“汚いや”“臭い”ワインを造ろうと思って造っている訳などありません。一人でも多くの人に美味しいワインを飲んで欲しいと願い、それを待ちわびている人達の想いが彼らを夏の畑に向かわせ、一枝一房の葡萄を育み、連綿と続く伝統を愛しみながら手を葡萄色に染め、ワインを醸造しているのではないだろうか...

私達は、そんな生産者の情熱や愛を
伝えられているのかな？

なぜ、濁っているの？ なぜ香りが鈍いの？ なぜ臭いの？

これらの事をキチンと理解できているだろうか...？

様々な環境（保存状態）やグラスの形状、気圧の変化、月の満ち欠けで味わいや色合いまでもが変化するデリケートなワインも存在します。（自然派といわれるワインには、特に如実に現れる）

そんなワインを私達は扱っている、言い替えれば丹精こめて造られた想いの籠ったワインを私達は授かっているのではないだろうか...

ともすれば、人生で最高の出会いともなる瞬間が一杯のグラスから生まれる事もあるが、またその逆に最低で最悪ということもありえる、と再度認識しワインへの知識を深めて往くべきなのではないでしょうか。

～常にワインへの優しさを～

常々思うのですが、愛情の籠ったワインリストは、美術館のようなものだと思いますか？

印象派や野生派、シュールレアリスムなどの絵画が並び、目当ての絵画を目の前にすると、鳥肌が立つような感動に体が震える事もある。ワインを愛する人々にとって、そのようなワインリストとの出会いは、そんな事がギュッと詰まったもので、見ているだけで胸がワクワクと躍るものです。

そんな素晴らしい物を身近に感じ、それを営みとして
いるのです、なんて素晴らしいことでしょう！

ワインを愛していますか？ 愛情を注いでいますか？

愛するものに対して、冷たくしたり、蔑ろにしたりはしないものです。

そのものに対する愛情が優しさを育てていくものだと思いますか？

そして、その向こうにはお客様の喜ぶ顔があります。
その瞬間を私達は演出しているのです。

あなたが選んだ一本のワイン、一杯のワインがお客様にとって
最高のワインとの出会いになることを願って...

あなたのワインへの想いや愛が、ワインを何倍もの味わいに
広げて行く事を願って...

今回のワイン課通信を締めさせていただきます。

長々とお付き合いありがとうございました。

銀座 大野 佐々木博明